

当室では、平成17年度にアクチノバシラス・プルロニューモニエの野外分離株を全国家畜保健衛生所等から収集した。アクチノバシラス・プルロニューモニエ感染症（豚胸膜肺炎）の予防には、血清型1型、2型及び5型に有効な不活化ワクチン等が使用され、治療にはオキシテトラサイクリン等の抗菌剤が使用されている。このため、野外で流行している当該菌の血清型及び薬剤感受性の動向は、その防疫にとって有用な情報となる。今回、アクチノバシラス・プルロニューモニエの血清型及び薬剤感受性を調査したので、その概要を報告する。

菌株は、15道府県から45株送付された。血清型別は、加熱抽出抗原を用いた寒天ゲル内沈降反応により実施した。45株中、血清型1型は4株（分離株の割合：8.9%）、2型は17株（37.8%）、5型は13株（28.9%）であり、型別不能株は11株（24.4%）であった。

薬剤感受性試験は、NCCLS法 - 寒天平板希釈法により行った。すべての株が、ABPC、CTF、EM、FF及びERFXに対して感受性を示した。耐性株はDSM（耐性を示した株の割合：4.5%）、KM（2.3%）、OTC（36.4%）、TMP（2.3%）及びTP（6.8%）で認められた。

今回、収集された菌株の血清型は、2型が多かったが、1型及び5型も分離されていることから、各地域・農場で流行している血清型を調査し、ワクチンの選択を行うことが重要である。薬剤感受性試験の結果、呼吸器感染症や腸管感染症の治療に汎用されるOTCに対して耐性を示した株が多かった。従って、今後とも、継続的にその耐性菌の動向調査を実施しながら、その調査結果に基づく適正な抗菌剤の選択に結びつく有用情報の提供を行っていきたい。

表 平成17年度に収集したアクチノバシラス・プルロニューモニエの薬剤感受性

抗菌剤	最小発育阻止濃度 (MIC) (μg/ml)			耐性限界値 (μg/ml)	耐性株数 (%)
	MIC 幅	MIC50%	MIC90%		
ABPC	≤0.125-0.25	0.25	0.25		
CTF	≤0.03125-0.25	≤0.03125	≤0.03125		
DSM	1->512	8	16	64	2 (4.5)
KM	1->512	8	8	64	1 (2.3)
EM	0.25-8	4	8		
OTC	0.5-64	1	32	4	16 (36.4)
TMP	≤0.125-32	0.5	1	8	1 (2.3)
TP	0.5-256	1	2	8	3 (6.8)
FF	0.25-2	0.5	1		
ERFX	≤0.03125-0.25	≤0.03125	0.125		

ABPC：アンピシリン、CTF：セフトリオキサム、DSM：ジヒドロストレプトマイシン、KM：カナマイシン、EM：エリスロマイシン、OTC：オキシテトラサイクリン、TMP：トリメトプシム、TP：チアンフェニコール、FF：フロルフェニコール、ERFX：エンロフロキサシン



品質確保検査に関する検討会について

一般薬検査室長 永井 英貴

平成18年11月28～29日に品質確保検査に関する検討会を開催したので、その概要を報告する。

動物用医薬品の危機管理対策の一環として、当所において品質確保検査の研修会を開催している。当該研修会を今後より効果的に実施していくために、現在の問題点、改善すべき点、事業の在り方等について、都道府県の立場に立って検討することを目的として、標記の検討会を、平成18年11月28日（火）及び29日（水）の二日間にわたり、14県の品質確保検査担当者に参集していただき開催した。

検討会は、各県の今年度（今年度の検査が終了していない場合には前年度以前）の品質確保検査等の結果、問題点、検討課題等について報告をしていただき、その発表内容に基づいて討議を行った。また、外

部講師2名を招いての講演及び質疑応答も行った。

1 品質確保検査等結果報告

14県すべての担当者に報告を行っていただいた。検査結果等だけでなく、各県での収去品目の選定から検査までの流れ、実際の検査における失敗例、問題点、疑問点等が報告された。どの県においても、少ない予算の中で工夫して品質確保検査が実施されていることが伺えた。また、県での検査結果が不合格となり、当所に再検査依頼のあったものについては、当該県の発表に続いて、当所からも再検査の結果を報告した。